ファンタジーに未来兵器を

インゼリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ファンタジーに未来兵器を

【Ｎコード】
Ｎ９７１６Ｙ

【作者名】
インゼリ

【あらすじ】
残業漬けのサラリーマンが、天才が発明した万能とも言える秘密兵器をもって、ゲームのようなファンタジー世界にトリップしてしまう物語です。

プロローグ（前書き）

初めて小説を書くので、至らぬ点が多々あるかと思います。
徐々にうまくなっていく・・・と、いいなぁ。

プロローグ

科学万能な未来世界、人類は宇宙に進出し、様々環境の元くらすことができるくらいの技術があった。
また遺伝子操作により、寿命も飛躍的に延び、ほとんど老化しない体も手に入れていた。

そんな世の中でも、突出した一人の天才がいた。
この物語の主人公ではないが。

この天才は、様々な発明を生み出した。
いかなる衝撃をも防ぐエネルギーフィールド、様々な敵に対抗出来る多種多様の武器。
これらは発表され、一部の機能は一般家庭にまで普及している。

これだけでも十分凄いが、今、天才は更なる発明品を完成させた。
それは、空間を制御する機能だ。
異なる空間を制御することにより、大量の武器、食料、燃料、資材を自在に出し入れすることができる。
更に、このアイテムの主機能を別空間に置くことで、サイズを極限まで小さくすることができた。
中継機器としてナノマシンを使用し、脳から直接制御することが可能になった。
また空間を転移することで瞬間移動すら可能になる。

天才は軍の秘密兵器開発部に所属しており、浮いた存在であった為、独自に開発を進めていた。幸い、今までの発明の評価もあり、予算

は潤沢に割り当てられ、自由に資材を注ぎ込むことができた。
そして無事に発明品が完成したのだ。
ただ、天才は完成を上司に知らせずに、テストすることにした。

もともと、自分だけで使うつもりで開発したのだ。
とは言え、いきなり自分で試すのは少々危険すぎた。そこで、ネットの掲示板にとある書き込みをしたのだ。
「ヒーローになりたい人募集」
当然、誰も真面目に相手しない。
そう、この物語の主人公以外には・・・。

ごく平凡といって差し支えない普通のサラリーマン、上杉高志（３０）。
３０歳とはいっても、老化防止の措置を１８歳の時に行い、見た目は１８歳の頃のままだ。
普通とちょっと違うところは、自分の事を、常に論理的でクールな男と思っていることだろうか。
ＩＴ系企業に勤める、敏腕システム・エンジニア（自称）であった。

その日も夜遅くまで一人で残業していた。
仕事として頼まれると、断ることが出来ない性分で、そのせいで他人の仕事を抱え込むことが多かった。
「あ～、俺にばっかり仕事押し付けられてる気がするなぁ。」
自分の境遇に不満を漏らしつつ、仕事を切り上げることにした。

なんとかその日のうちに自宅まで辿り着いた。
そして、日課となっているバーチャルゲームＲＰＧ『ヒーロー・テール？』を始める。

高志がプレイしているのは、？とつくように有名なシリーズ物のゲームだ。
このゲームは王道的なＲＰＧだったが、非常によく作りこまれており、多くの人が親近感を覚える不思議なゲームであった。
初代（ヒーロー・テール１）の発売当初は、作成者の一人が超能力を使えるということで、とても話題になり、爆発的に売れた。

「あー、この世界に移住したい・・・。」

と、まぁ、現実逃避をしていた。
途中、ゲームのクエストに行き詰まり、ネットで情報を収集することにした。
ネットワークで「ヒーロー」で検索を掛けると、候補がいくつか表示され、その中に「ヒーロー募集」が目に入った。
疲労もピークにあり、いつもなら無視するような内容であったが、ついつい、高志はその募集に応募してしまった。

メールを送ったところ、２日後に小包が届いた。
中に入っていたのはブレスレットであった。
「なんだこりゃ、ブレスレット一つで何が出来るってんだ。まぁ折角くれたんだ、駄目もとで試してみるか」
と、早速つけてみる。

ズキッっと手首に痛みが走った。
ブレスレットから針のようなものが突き出し、腕に刺さったようだった。

すると腕輪から、音声が聞こえてきた。
『装着者を確認、ＤＮＡを識別、登録しました。体内ナノマシンを

調整中・・・』

しばらくすると、今度は視界にメッセージが表示された。

『体内ナノマシン調整完了。システム起動完了。』

「おおっ、なんだこれ？」

おそらくは、ナノマシンを通じて脳に直接文字を表示しているのだろうと推測した。

高志はまずは説明書を探したが、どこにもなかった。

「うーん、使い方はどうするんだろう」

すると視界に様々なメニューがでてくる。

その中のマニュアルがあり、「マニュアルみたい」と思っただけでマニュアルの詳細が表示されたのだ。

「なるほど、意識するだけで選ぶことができるのか。」

概要をざっと読んでみると、どうやら様々な機能がついていることがわかった。

中でも目を引いたのが、変身機能と、テレポート機能だ。

「よし、早速変身してみるか！」

なんとなくポーズをとる高志。

「変身！」

叫ぶ必要はないのだが、そこはそれ、男である。

すると、全身が光に包まれ、黒い金属のフルフェイスと鎧をまとった。
一見するとロボット兵器のような概観になり、鏡をみた高志はちょっとした興奮状態になった。

（・・・一体どんな仕組みになっているのかは分からないが、これは最新テクノロジーなんてレベルじゃないことは確かだな）

とは言っても、「じゃあ、危ないから、返品しよう」とは微塵も思わない高志。

次にテレポートを使うことにした。
転送先は3メートル先にしてみた。

（・・・流石にテレポートはちょっと怖いな）

しかし、好奇心には勝てずに実行してしまう。
一瞬視界がグラっと揺れたかと思うと、確かに3メートル程移動したようだった。

「スゲー！テレポートなんて実在したのか！」

テンションが否応なしに高まる。
今度はもっと遠くにいってみようと思い、近所のマンションの屋上へテレポートしてみる。
やはり普通にテレポートできた。
そうなると段々欲がでてきてしまう。

マニュアルをみると、宇宙空間でも、深海や、太陽の中であっても、エネルギーフィールドにより活動可能なようだ。

まずは、様子見で、海の浅い部分にテレポート、そして深海、宇宙へテレポートしてみた。

（・・・さすがに太陽は、やめといたほうがいいよな）

活動可能な時間が視界の隅に表示されているが、膨大な数字なので当分は大丈夫だろうと推測していた。
実際には、エネルギーフィールドで薄い膜を作り、有害な光線等はシャットアウトし、酸素は別空間から徐々に転送し、エネルギーフィールド内に展開している為、別空間にある酸素の分だけ宇宙でも活動出来るのだ。
専用の別空間には、天才が事前に仕込んでおいた数々のアイテム等と一緒に空気も当然大量に入っている。

その後、冥王星までテレポートした直後、視界が真っ暗闇に閉ざされた。

げ、なんだこりゃ、まさかいきなり故障か!?と、思ったが危機感を感じ、とっさに安全な場所にテレポートとしようとしたが、相変わらず暗いままだ。
視界にはエラーの文字が大量に表示されている。

（・・・あ、やばい、いきなり死ぬのかよ。どーせ死ぬなら、ヒーロー・テールの世界に生まれ変わりたいな・・・）

そして意識を失った。

・　・　・

数時間後、天才は自分の発明品がこの世界から消えたことを検知していた。
いかに宇宙であろうと太陽の中であろうと活動可能なのだ、検知出来ないということは、故障したか、異空間に取り残されているか、それともももっと想定外のことが起こったか。
「いずれにしても、テレポート機能が一番怪しいな。」
こうして天才は、消えた自分の発明品と、犠牲になったかもしれない使用者を探索するために新たな発明品を作ることを決めた。
それが完成するのは当分先の話だが。

第一話（前書き）

続編の投稿方法の確認の意味でサクっと1話目を掲載。（´・∀・`）

第一話

雲ひとつない空。
そんななかで、地上１メールほどの場所に、突如黒い空間が現れる。
中からは人らしきものが出てきて、落ちてゆく。

衝撃で高志が目を覚ますと、そこは草むらの中だった。
遠くには山や、川のようなものが見える。

（・・・うーん、ここはどこの田舎だ）

高志が知っている限り、このように自然が丸々残されている所など、
少なくとも日本にはないはずだった。

（・・・取りあえず、地球には帰ってこれたのかな？）

ホッと胸をなでおろし、辺りを見回す。
辺りに見覚えはなく、近くの植物もみたことがないものだった。
まずは位置を確認しようと、視界のメニューから地図を表示させる。

『ーーー　現在位置情報取得エラー　ーーー』

（・・・なんだこりゃ、さっきの事故で故障したのかな？）

そこで高志は空中から、近くの町へ行こうと考えた。

（・・・えーっと、空を飛ぶにはどうすればいいのかな？）

マニュアルを検索すると、どうやら、変身後の状態で色々なオプションパーツを付与することができることがわかった。
それらのオプションパーツはユニットというものらしく、一つの機能しかないものもあれば、複数の機能がついたマルチタイプのユニットもあった。
そのオプションの中に「飛行機能を持ったマルチタイプのユニット」も存在した。
早速、そのユニットを召喚した。
すると翼のような装置が現れ、自動的に背中に装着された。
横に広がると２ｍくらいのサイズで、ボディーと同じ黒い金属でできていた。
また、翼自体も武器となっており、レーザー光線を出すことも可能となっているようだった。

（・・・黒の翼って感じで、堕天使って感じだなぁ）

早速飛び立ち、雲の辺りまで上昇すると、町を探す為に辺りを散策することにした。
のんびりと飛んでいると、前方に大きな鳥が見えた。

（・・・随分デカい鳥だなぁ）

しかし、段々近づいてくるにつれて異常さがわかってきた。
その鳥は全長１０メートルはあろうかという巨大な恐竜のような鳥だった。

高志は、ゲームに出てくるドラゴンの亜種「ワイバーン」を連想した。

「これは、ナノマシンが見せてる幻なのか、それとも夢なのか・・・」

呟きながら戸惑っていると、ワイバーンらしきものが噛み付いてきた。

バシッ

ワイバーンの牙は、エネルギーフィールドに弾かれる。
そこでどうやら現実らしいと認識した高志は急いで行動にでる。
さっそく、飛行ユニットのレーザーを使おうとした。

『安全の為、まずは照準の調整を行います。周囲に人がいない場所に移動してください。また照準調整用ターゲットを召喚し、正面１００メートルの場所に設置してください。』

どうやらかなりの安全設計らしい。

「あほかっ！この状況でそんなことできるか！」

叫んだ高志は、この調子では、他の射撃タイプの武器はすぐにはつかえないだろうと判断した。

（・・・えーと、すぐに使えそうな接近戦用の武器はないのか、武器武器・・・っと）

視界に接近戦用武器のリストが表示される。
その中で剣らしきものを選択した。
ブラズマブレードと表示されていた剣を召喚すると、手に柄が握られていた。
メニューには「プラズマブレードのスイッチのＯＮ／ＯＦＦと出力バーが表示されている」
すぐにＯＮを選択すると、剣の柄から、１ｍほどの光の刀身が現れた。
次に、出力バーを若干上昇させ刀身を２ｍほどにする。
「よし、これならいけそうだ！」

それを目にしたワイバーンが咆える。

一瞬たじろぐ高志。
しかし、エネルギーフィールドがあり、それが有効だと再認識し、冷静になる。
プラズマブレードを上段に構え、一気にワイバーンに近寄る。
衝突するすれすれで一気にプラズマブレードを振りかぶり、ワイバーンの首を一刀両断した。
ワイバーンは悲鳴すら上げれずに、落ちていく。

肉が焦げる臭いと、ワイバーンを両断した際の感触が、これが現実だということと、襲われたとはいえ、命を奪ってしまったことを実感させる。
身勝手なもので、小さな虫程度であれば、さほど気にならないが、これだけ大きな生物を殺すと多少は罪悪感を感じるのであった。

（・・・うーん、ちょっと罪悪感を感じるなぁ。まぁ正当防衛ってやつだ、悪く思うなよ）

武器を手にしてちょっとした興奮状態から、一気に醒めた感じだ。

（・・・ともあれ、現状を分析しないとな）

まず、ここが地球ではない可能性を考慮する。
確かに、人類は宇宙に進出し、居住可能な惑星も少ないが発見している。
そんなところに、あのときの事故で偶然この惑星にテレポートしたのではないかと推測した。
試しに地球にテレポートしてみようとしたが、まったく反応がなかった。
調べてみると、テレポートは現在地からの相対的な位置が分からないと出来ないことがマニュアルに記載されていた。
元々最初にテレポート出来たのは、太陽系内の情報が入力されていたからであった。

（・・・まさか、無人の惑星にきてしまったってことか？）

自分の推理で、絶望感に襲われる。
さすがに無人の惑星で独り寂しく暮らしていくなんて、耐える自信がない。
しかし、無人惑星と決め付けるのはまだ早いな、もしかすると調査隊が来ているかもしれないし、原住民がいるかもしれないと、希望を新たに辺りの探索を始めることにした。

（・・・レーダーのような機能はないのかな？）

マニュアルをあさって見ると、それらしき機能をいくつか見つけた。
その中の生体レーダーを選び、対象を人間に限定してサーチをかけてみた。
すると、１０ｋｍ程先に数人の反応があった。

（・・・助かった、調査隊かもしれない）

もしかすると犯罪組織の拠点だったりするかもしれないと思い直し、こっそり近づくことにした。
そこでステルス機能がないかと確認したところ、一応それらしき機能があり、それを発動させて、近くまで飛んでいった。

目視出来る距離まで近づいたところで、徒歩でこっそり近づくつもりだったが、目にした光景をみて方針を変えることにした。
どうみても、村であった。

（・・・これは調査隊とか、犯罪組織の隠しアジトとかじゃないな・・・。まぁ、無人惑星じゃないだけ救いか）

高志は、村の近くに下りて、武装をすべて解除した。
そして、歩いて村に向かうことにした。
村の見た目的に、文化レベルは地球のそれとは雲泥の差があることは一目瞭然だった。
そこへ、人が飛んで現れたら、悪魔か、モンスター扱いされるのがオチだろうと思い、普通の格好で近づくことにした。

（・・・とはいっても、言葉は通じないだろうし、服装自体もきっと全然違うんだろうなぁ・・・。まぁ、異国の旅芸人ってことにし

ておけば、なんとかなるだろう）

今のうちに、ここでの自分の立場設定を考えておく。
この辺りは理論的な人間といったところか。ただし、楽観視しすぎている感が否めないが。

そうこうしている間に村にたどり着く。
途中、農作業をしていた村人が怪訝な眼差しを何度か向けてきたが、特に話し掛けられることもなかったので、そのまま堂々と村に入った。

「宿屋とかあるのかなぁ・・・。」

と、高志が呟くと、近くにいた村人が話しかけてくる。

「アンタ、旅人かい？」
いかにも近所のオバちゃんといった感じの女性だった。
何で日本語？と内心では驚きの声を上げる。

「ええ、旅芸人をしているものです。上杉高志と申します」
どうやら言葉は通じるらしい。
すぐに自分の仮設定を「異国の旅芸人」から、「ただの旅芸人」に変更する。
なぜ日本語が通じるのか釈然としないものを感じるが、気にせず続ける。
「どこか良い宿があれば紹介頂きたいのですが」
「ああ、それなら村長の家に泊めてもらうといいさね。この村には宿はないけど、村の外から来た人のために、村長の家で寝泊りしてもらっているからね」
旅芸人ときいて、最初の怪訝な表情が若干緩和されたようだった。

「そうですが、差し支えなければ、場所を教えて頂きたいのですが」
「ほら、あっちにみえる、一番大きな家だよ」
指を指された方向をみると、確かに他の家よりも一回り大きく、立派な家が目に入った。

「ありがとうございます。早速伺ってみます」
「ああ、村長は気さくないい人だから、あんまり遠慮しなくても大丈夫さね。アンタ若いのに随分しっかりしてるねぇ」

おばちゃんに手を振られ、その場を後に、村長の家に向かった。
歩きながら高志は考えていた。

（・・・それにしても、なぜ日本語が通じるんだろうか。
それに、今きづいたけど、あのワイバーンといい、この建物の感じどこかでみたことがあるんだよなぁ）

数分考え込む高志。

（・・・あっ、そうだ。ヒーローテール?だ!
大分前にやったからかなりうろ覚えだけど、確かにこんな感じの建物が多かった気がする。
まさか、ここはゲームの中の世界ってオチか?
うーん、考えても分からんな）

そうこうしている間に、村長の家の前についてしまった。

レンガと木材を使ったような家で、２階建ての大きな家だった。

「すみませーん！どなたかいらっしゃいませんかー？」

取りあえず、叫んでみた。

すると中から一人の少女がでてきた。

黒髪のロングヘアで、１０台後半であろう、一目で美少女とわかる程、整った顔立ちだ。

どちらかと言えば、可愛い系というよりも、美人系といったほうが正しいかもしれない。

高志が見とれていると、少女が話しかけてきた。

「どなたですか？父に何か御用でしょうか？」

おそらく、村長の娘なのだろう。

「すみません、旅の者ですが、一晩泊めていただけないかと思いまして。宿を探したのですが、こちらの村では、宿がないそうで・・・」

そこまで聞いて得心がいったのか、少女が答えた。

「では、どうぞおあがりください。」

その後、応接室らしき場所に案内された。

「父を呼んでまいりますので、しばらくこちらでお待ち下さい。」

と言って、少女は応接室らしき場所から、出て行ってしまった。

（・・・さてさて、お金とか取られるのかなぁ。夕飯どうしよう。さすがに無料でくれるってことはないだろうしなぁ。異空間に保存食とかあるのかなぁ）

そして、メニューから食料関係を検索すると、軍隊用の保存食らしきものと、なぜかお菓子が大量にあることがわかった。

（・・・保存食は分かるが、なぜ、お菓子が大量に。これはあれか、子供を救助したときにあげろということか？）

しばらくしていると、先ほどの少女と、威厳のありそうな、ナイスミドルなおじさんがやってきて、挨拶をした。

「こちらのライム村の村長を務めております、イザールと申します。こちらは娘のサリーです。」
紹介された先ほどの少女（サリー）が頭を下げる。

「旅芸人をしております。上杉高志と申します。」
と、いって高志も頭を下げる。

「ウェスギタカシ様ですか？変わったお名前ですね。」
ちょっと発音が違うと思った高志だったが、気にせず答える。

「遠い国から、旅をしておりまして、この辺りではない名前かもしれませんね。言い辛いと思いますので、タカシと呼んでください。」

「なるほど、お若いのに遠い異国の地から旅をされているとは。さぞかし大変でしょう。何もありませんが、今日は我が家にお泊まりください。」

「ありがとうございます。あと、宿泊料はどれほどでしょうか？ちょっと今は持ち合わせがなくて、出来れば、何か働く事で代金とさせて頂きたいのですが・・・。」

ちょっと遠慮気味に聞いてみる高志。
すると、ちょっと悩んでから、イザールが答えた。

「そうですなぁ。では、最近、村の畑が野生の獣に荒らされているので、それを捕まえるのに、ご協力してもらえないでしょうか？村の者で交代して見張っているのですが、なかなか捕まらなくて困っておったのです。なぁに、野生の獣といっても、小さい狼らしいので、そうそう負けることはないでしょう。」

「なるほど、そういうことであれば、是非ご協力させて頂きます。」

こうして、高志はこの世界で初のクエスト?を開始することになった。

第一話（後書き）

ちょっと短めでしたが、本格的なのは次以降ということで（、・ω・、）

第二話（前書き）

今回も短めかもしれません。
なかなか区切りがいいところまでだと、いい感じの長さにできないものですね。（´・ω・`）

第二話

泊めてもらう為に、クエスト?を受けた高志は、早速、見回りにいくことになった。
畑荒らしと聞いて、夜中に見回りをするのかと思い込んでいたが、話を聞いてみると、被害は夜よりも昼の方が多いのだという。
そして荒らされるのはサツマイモ畑だけだという。

（・・・しっかし、何で獣が野菜を狙うんだろなぁ。特に狼なんて肉しか食わないような気がするんだけどなぁ。地球の狼とは違うのかもしれんなー。
まぁでも、引き受けた以上は、やらないとな。ゲームのクエスト感覚でやってみるかー。）

小さいとはいえ、流石に素人だけで野生の獣をどうにかするのは無理だろうということで、村で狩人をしているダンという人物と会うことになった。

サリーに案内されて、ダンが見回りをしている畑に着くと、さっそくそれらしき人物が見つかった。
年の頃は３０代後半だろうか。
短髪で、小麦色の肌をしていて、引き締まった体は筋肉美に溢れていた。
腰には短剣らしきものと、背中には弓矢を背負っていた。

「こんにちは、ダンさん」

と、サリーが気軽に声を掛ける。

「よう、サリー。そいつは？」

「こちらは、旅芸人のタカシさんです。」

紹介されて、あわてて自己紹介する高志。

「はじめまして、旅芸人の高志と申します。」

「随分変わった格好してると思ったが、旅芸人か。旅芸人がこんなところに何のようだ？」

狩人のダンとしては、畑に旅芸人がくるのが疑問なのだろう。

「実は、村長の家に泊めてもらう代わりに、こちらで畑荒らしのを捕まえる為の手伝いをすることになりまして」

「ふむ。まぁ、そういう事なら手伝ってもらうか。なぁに、基本的にはオレが獲物を仕留めるから、見つけたら教えてくれればいい」

「分かりました。出来そうであれば、私の方で捕まえるなり、退治するなりしても良いですか？」

高志としては、狼くらいなら何とか出来るだろうと踏んでの答えであった。

「ほぉ、少しは腕に覚えがあるのか？まぁ、野生の獣ってのは見た目よりも遥かに手強いから気をつけろよ。無理そうなら遠慮なく助けを呼べばいい」

しかし、ダンとしては、血気盛んな若者には良くある恐れ知らずか、功名心だろうと思っていた。ダン自身も昔はそんなタイプの若者だったのだ。

「無理そうであれば、すぐに助けを呼ぶので大丈夫だと思います。その場合逃げられてしまうかもしれませんが」
（・・・問題は、そうそう簡単に見つかるかどうかだなぁ）
そう答えると、ダンは納得したようだった。

「それでは、私はこれで失礼しますね。タカシさん、頑張ってくださいね。」
と言って、サリーは家に帰っていく。
（・・・ああ、やっぱり帰っちゃうのね）
内心しょげる高志であった。

「よし、それじゃあ、早速始めるか。タカシはあっちの小屋の辺りから監視していてくれ。」
ダンが指した先、１００メートルほど先には、ほんとうに小さい小屋があった。恐らくは農具を入れておいたりするものであろう。

「分かりました。ちなみに、いつごろまで見張ってればいいのでしょうか？」
（・・・時計とかあるんだろうか？）

「日が沈むまでやる必要はないが、夕方の鐘がなるまででいい。鐘の音が聞こえたら、ここに戻ってきてくれ。」

「では、その頃に。」
（・・・やっぱり、時計ってものは無いかもしれないな。この村では、鐘の音で大体の時間がわかるようになっているのかもしれない。

時間自体を調べるのは日時計か何かあるんだろう。）

高志は、言われた小屋に辿り着くと、早速、生体レーダーを起動した。

（・・・さてさて、小動物で検索してみるか）

すると、近くの森に数十件の反応があった。

（・・・多すぎて、これじゃあ、使い物にならないなぁ。獣が増えすぎて畑のを狙ってきてるかもしれないなぁ。
食べれる獣とかいるんだろうか？　捕まえれば調理してくれるかなぁ。
さすがに自分で解体するのは、キツいしなぁ。）

などと暢気に考えていると、遠くに獣らしき姿が見えた。
どうやら、噂の狼のようである。
小さいといっても、それなりの大きさはあり、毛並みは見たこともない濃い青であった。

「ワォーン！」

一声吼えたあとに、狼は森の茂みに逃げ込んだ。

ダンがそれを見つけ、追いかけていく。
高志も、慌てて後を追うようについていく。

高志も追いかけているが、なんとか視界にダンの姿が見える程度の距離だ。
ダンの方も走りながら弓を撃つことはなかなかできないようだった。
狼は時折、吼えてから、森の奥へ奥へと進んでいく。

（・・・ん？　何かおかしくないか？　何でわざわざ発見されるように吼えたんだ？　しかも、振り切るつもりもなさそうな？　・・・誘っているのか？）

と、疑問に思った高志は、一瞬考え込んだ後、生体レーダーを確認した後、急いで畑に戻った。

（・・・やっぱり）
畑に戻ると、そこに見えたのは、小さな猪達だった。
どうみてもまだ子供で、数匹の猪達が仲良く芋掘り？をしていた。
どうやら、こちらには気づいていないらしい。

（・・・なるほど、狼は囮でこっちが本命かぁ。そりゃあ、そうだよなぁ、あの狼は畑になんもしてなかったし、動きが誘っているよう感じだったし。にしても、狼と猪って仲が良いのか？）

小さい猪くらいなら、簡単に捕まえられるだろうと思い、こっそり近づいて捕まえることにした。

（・・・さて、殺すのも可哀想だし、何か生け捕りにするアイテムはないかなぁ）

と、捕獲用アイテムの検索をしていると、背後から突然何かに襲われた。
当然、襲ってきたソレは、エネルギーフィールドに弾かれた。
そして、距離を置いて唸り声を上げる。

「ガルルルゥ！」

どうやら、狼が戻ってきたようだった。

「戻ってきちゃったかー」
と、高志が呟いている間に、猪達は芋を咥えながら逃げていく。

「フン、魔法か、多少はやるようだな」

「・・・え？」
（・・・まさか、狼が喋った？　いやいや、いくらなんでもそれはないだろ）

「まさか、お前が喋ったのか？」
そういって、目の前の狼を指差す高志。

「愚弄するな、人間よ。我はただの狼などではない！高貴なフェンリルの一族。貴様ら人間にどうにかできると思うなよ？」

「ただの狼じゃなかったんだなー」

言った途端、怒ったようにフェンリルが襲ってくる。
今度は体当たりではなく、牙で噛み付いてきた。

バシッ

それでも結果は変わらず、エネルギーフィールドで弾かれる。

「いやいや、学習能力ないのか、お前は」

「おのれ、小ざかしい真似を！」

悔しがるフェンリル。

「だから、なんもしてないだろ！」

見た目は、大型犬のサイズだが、言動からすると、子供のようなイメージを受ける。

ちょっと可笑しくなってきた高志は、話してみることにした。

「というかだな、なんでその誇り高きフェンリル様が、畑荒らしの手伝いなんてしてるんだ？」

「フンッ。・・・まぁ、いい、教えてやろう。我が一族は、何百年も前からずっと、この森を守護してきた。だが、最近この森に忌々しいワイバーン共がやってきたのだ。」

（・・・あのワイバーンか、それに『共』ってことは複数いるってことなのか）

「無論、よそ者に好き勝手させる我が一族ではない。だが奴らには空を飛ぶことが出来る翼がある。そのせいで、森の者が襲われても我等が駆けつけたときには、既に空の上というわけだ。」

「そりゃあ、空飛べる相手にはそうなるわなぁ。ってか、仮に間に

合ったとしても、勝てるのか？」
正直、高志としては、このフェンリルがワイバーンに勝てるとは思えない。

「我も多少は魔法が使えるが、ワイバーンには・・・無理かもしぬが、父上ならば倒せるだろう。」
ちょっと言い淀みながら答える。

「魔法ねぇ？　まぁ、お前には荷が重いだろうな。ははぁん、そーゆーことか。」
なんとなく事情を察した高志。
この時、高志は魔法なんてあるわけがない、子供の虚勢というか妄想だろうと、あまり気にかけていなかった。

「それで、お前じゃワイバーンは倒せないから、代わりに森の動物達の為に、こうやって囮役をやってるわけだ。」
そう言って、ニヤニヤしながら、フェンリルを見つめる高志。

「だ、黙れっ！人間め！　この役割もとても重要なのだ、パパもそう言っていた！」
慌ててパパといってしまうあたり、どうやら図星だったらしい。
「そ、それにあの子達は、親をワイバーンに殺されている！あまり森の中をうろうろするのは危険なのだ！だから早く食べ物を手に入れて巣穴に帰らなければならないのだ！」
その後もゴニョゴニョと言い訳をしている。

（・・・うーん、なんとか解決できそうなだなぁ。要は、あのワイバーン達を倒すなり、追い払えばいいんじゃないかなぁ？）

人語を話すフェンリルと、小さい猪達をみてしまった後では、ワイバーンを何とかする方を選んでしまうのは人情だろう。

「よし、わかった。それじゃあ、ワイバーンはなんとかしてやる。だから、もう村の畑には手を出すな。」

「ほざけっ！　多少魔法が使えるようだが、その程度で人間がワイバーンに勝てるものかっ！」
当然、フェンリルとしても人間、それもこんな貧弱そうな若者一人が、ワイバーンに勝てるわけがないと思っている。

（・・・ん～、いや、実は既に一匹倒してるんだけどなぁ。まぁ、言ったところで普通は信じないよなぁ。）

「わかった、わかった。じゃあ、こうしよう。3日だけ待ってくれ。その間にワイバーンはなんとかするから。」

「む、長い、1日でなんとかしろ！　3日も経てばあの子達が飢え死にする！」
偉そうにフェンリルが答えた。

（・・・なんで、コイツが偉そうなんだ。まぁ、確かに3日も食料がないと厳しいだろうなぁ。）

「わかった、わかった。じゃあ、明日またここに来いよ。ワイバーンを倒したのを確認したら、約束は守れよ?」

「フンッ、承知した。まぁ、無理だとは思うがな！」
やはり、偉そうなフェンリルであった。

そしてフェンリルも森へ消えていってしまった。

（・・・さてさて、難易度が格段に上がった気がするのは気のせいだろうか。）

第三話（前書き）

なんとか第三話投稿です（´・∀・、）
今回は説明が多いかもですが、気長に読んでやってください（´・ω・、）

第三話

成り行きで、ワイバーンを退治することになってしまった、高志。
どうやって、探そうかと考えているところに、狩人のダンが戻ってきた。
事情をダンに話すと、流石にダンも驚いたようだ。
しかも、フェンリルはこの村の守り神の象徴として、崇められているのだという。

高志が「何故、気がつかなかったんですか？」と聞いてみると、

「そもそも伝説の類だと思ってたからな。それにいたとしても、もっと大きいやつとか、光ってるとか思うだろー？　普通の狼とほとんど変わらんから全然気づかんかったな。　危うくこの村の守り神様を退治してしまうところだった。」
と言って、ワッハッハと笑っていたくらいである。

（・・・いや、たぶん、無理じゃないかな、ダンさんじゃ。）
と、高志は心の中で失礼な事を呟いていた。

事実、ダンはあっさりと、子供のフェンリルに踊らされていたのだから、両者では役者が違うといったところだろう。
そして無意識のうちに『ちょっと頼りない人』に分類されてしまうダンさんであった。

「しかし、どうするんだ？ワイバーンなんて、国の騎士団でもない

限り退治なんて出来んぞ？」

ダンの疑問も当然だった。
ワイバーンは、竜族であり、ダンが知る限り一般人がどうにか出来るレベルの敵ではない。
騎士団のような組織か、英雄と呼ばれるレベルの人でもない限り無理だ。

「まぁ、ワイバーンは倒したことがあるので、倒せることは倒せますが・・・」
どうせ信じないだろうと思っていってみる。

「タカシ、お前、変な格好しているとおもったら、まさか魔法使いか？」

「え？　魔法ってそんなのあるわけないでしょ」
一瞬、いい歳して何を言ってるんだ？と怪訝な顔になる高志。

「おいおい、何を言ってるんだ。って、ひょっとしてお前の故郷では魔法って呼ばないのか？」
ダンも何を言ってるんだ？といった顔つきになる。

「い、いや、何をいってるのか・・・」
ますます困惑する高志。

「まぁ、実際にみてみればいい。サリーならちょっとした魔法が使えたはずだから、頼んで見せてもらうといい」

「は、はぁ・・・」

高志は、どうせ手品か、おまじないのようなものだろうと、取りあえずは納得しておくことにした。

ちょうどその時、夕方の鐘の音が聞こえてきた。

「さて、何にせよ、今日のところはここまでにしておこう。何か力になれることがあれば言ってくれ。といっても、魔法のことはほとんどわからんがな」
そう言って、さっさと帰っていくダンであった。
仕方なく、高志も村長の家へと戻ることにした。

そして村長の家に着いた高志は早速、サリーに魔法をみせてくれないか頼んでみた。

「いいですけど、私ではあんまり大したものは使えませんが・・・」

と言って、なにやらゴニョゴニョと呪文を唱えて両手を差し出すと、まぶしいばかりに輝く明かりが現れた。

「！！！」
あまりのことに、一瞬言葉を失う高志。
（・・・なんだこれ、まさか、本当に魔法するなんて！）

「凄い！　他にはどんなことが出来るんですか？」

興奮気味で、身を乗り出すように聞いてみる。

「私もそんなに使えるわけじゃないので・・・」

と、頬を赤らめながら答えるサリー。

どうやら、サリーは明かりを作り出したり、炎を出す程度しか出来ないらしいとのこと。

もっと大きい町にいけば、本格的な魔法を使える人もそれなりにいるのだという。

また、魔法にも種類があり、大きく分けて４つ（黒魔法・神聖魔法・精霊魔法・特殊魔法）に分類されるそうだ。

【黒魔法】

サリーが使ったように、魔力を消費をして発現するのだという。

【神聖魔法】

神に祈りを捧げることによって発現する魔法で、回復や浄化の魔法が主となるらしい。神に仕える神官の多くがこれを使えるらしい。

【精霊魔法】

この世界にいると言われている精霊の力を借りて行使する魔法らしい。

【特殊魔法】

それ以外の魔法で、実際には様々な種類があるが、ほとんどが特定の種族しか使えない等の変わった制限等がある。

そこまで聞いて、高志はあることを思い出す。
（・・・確か、ヒーロー・テールでも同じような設定だったような気がする）

そして一つの推測に辿り着く、ここは地球でも、元いた世界でもなく、別の世界、ヒーロー・テールの世界なのではないか？と。
もしくは、ヒーロー・テールがこの世界を模して作られたゲームか、だ。

（・・・となると、ある程度はこの世界の常識が見えてくるな。取りあえず大きな街にでも行って情報を集めたいけど、まずはワイバーンの件を何とかしないとなぁ）

「そろそろ夕飯の時間ですので、出来ましたら呼びにきますね。」
考え込む高志をよそに、サリーはそういって、去っていった。

（・・・いずれにしても、今後この世界でやっていくには、何が出来るのかを把握しておかないとなぁ。とは言っても、今のうちに出来そうな事と言えば、マニュアルと、別空間にあるアイテムの確認くらいか。）

高志が、マニュアルの詳細を読んでいると、サリーから声を掛けられ、夕飯をご馳走になることにした。
夕飯は、村長のイザールと、サリーとの３人で一緒にとることになな

った。
高志が席につくと、
「お口に合うかわかりませんが、この村で採れたものを使っています。どうぞお召し上がりください。」
と、若干照れながらサリーが薦めてくれる。

メニューは、ご飯（玄米っぽい）と、焼き魚、サラダらしきもの、であった。
焼き魚は塩で味付けされているが、サラダらしきものには、香辛料のようなものがふりかけられていたが、かなりの薄味だった。素材の味を楽しめるといえば聞こえがいいが、単に調味料があまり発展していないのだろう。

（・・・うーん、とりあえず白米が欲しい。あと、醤油が欲しいなぁ）

と、在庫リストの中から調味料を検索してみると、一通りの調味料があることが分かった。ついでに大量の砂糖と、カレー粉が見つかった。

（・・・カレー粉はなんとなくわかるが、なぜ砂糖が大量にあるんだろうか。お菓子作れってことか？　しかも、なぜかお菓子のレシピも大量に保存されているようだし、どうにも偏りがあるようにしか思えないんだが、これを用意してくれた人ってどんな人なんだろうなぁ）
そんな感じで悩んで（？）いると、サリーが気にしたように声を掛ける。

「お口に合わなかったでしょうか？」

「い、いえ、ちょっと考え事を。あ、ちなみに、ご飯は白米はないのでしょうか？」
ちょっと厚かましいかな？と思いつつも聞いてみる。

「ハクマイとはなんでしょうか？」
サリーも、イザークも分からないようだった。

「えーっと、このお米の殻を剥いた感じのようなものなんですが、この辺りでは、お米はみんな玄米なんですか？」

「ゲンマイというのも何かわかりませんが、お米はみんなこのようにして食べます。お米の殻を全部剥くって、凄く大変じゃないですか？」
サリーはそんなことをしていたら何時間掛かるかわからないと思っているのだろう。

どうやら、白米にして食べるという習慣はないらしい。
この世界の住人は、食文化に興味が薄いのか？と疑問に思ったが、簡単に答えておくことにした。

「いえ、一粒一粒、剥くわけではなく、機械を使って精米・・・じゃなくて、お米に衝撃を与えて殻を剥く方法があるんですよ。」

「ほー、それは興味深い。そうするとどうなるのかね？」
意外にもイザークが食いついてきた。

「ふっくらとして、食べやすくなると思います。味に関しては好みがあると思いますが、私の故郷では、圧倒的に白米が主流でした。よろしければ、明日の朝は私が、白米を作りましょうか？」

と、切り返したところ、二人から是非にと言われて、白米を作ることになった。
幸い、別空間には白米と調理器具一式（炊飯器含む）があったので、それを使うつもりだ。
一応、保存がきくように保存食のご飯もあるようだったが、今回は白米を使い、炊立てを味わってもらうことにした。

（・・・ああ、なんだか、自分で仕事を増やしてしまったかもしれない。）
などと思ったりしつつも、結局は会話の流れで白米だけでなく、明日の朝食は全て高志が作ることになった。
仕事をするのが好きなのか、仕事の方が好きで寄ってくるのかは不明だが、難儀な運命なのだろう。

夕食も終わり、高志は部屋に戻ると再びマニュアルを読み始めた。
別空間にあるアイテムは、５つの空間に分かれているようだった。
要約すると次のような感じである。

？制御空間・・・意図的にアイテムの出し入れは出来ず、ここに空間制御等の制御装置がある。また、ここには作業ロボットや、発電装置、充電装置、弾薬製造機等もあり、これらは自動的に使われている。

?登録アイテム空間・・・武器や便利な道具が入っている。ここには当然意図的に出し入れ可能だが、予め入っているものしか出し入れできない。ここにあるものは、自動的に制御空間から、作業ロボット等が送られ、修理・充電・弾薬補充等が行われる。

?食糧空間・・・ここは、大型の冷凍庫、冷蔵庫等があり、冷凍・冷蔵・常温（低湿度）・常温（高湿度）のどれかに保存できるようだ。入れるときにアイテムの名称、属性などをつけておく必要がある。
一度に出し入れできるサイズは１ｍ×１ｍ×１ｍが限界。

?フリー空間・・・恐らく今後一番使うことになるであろう。なんでも自由に出し入れできるがタイプは常温のみ。こちらも同じく入れるときにアイテムの名称、属性などをつけておく必要がある。
一度に出し入れ出来るサイズは若干大きく３ｍ×３ｍ×３ｍまで。
修理や補充に必要な資材もここにあり、属性に『資材』とつけて入れておくと必要に応じて自動的に使われる。

目立った注意事項としては、どの空間に関しても共通で生き物は入れるなと但し書きがついていた。通常の空間ではないので、どんな影響があるか分からないのだそうだ。
ただ、微生物程度であれば特に影響はないそうだ。
また巨大なものをそれぞれの制限サイズ分削り取って別空間に入れるようなことはできない。安全の為にそのような設計になっているらしい。

そして最後の空間。
（・・・自爆装置空間？自爆装置があります。って、マジかよっ！
なになに・・・誤作動を防ぐ為に異なる方法で3回確認が行われ、最期に爆発の規模を設定します。自爆を一度起動すると停止は不可能です。１０分後に希望の規模の爆発を起こします。って、一体何を考えてこんなものつけたんだ。機密保持か、最期の美学なのかは知らんが。まぁ使うことなんてないだろうが。）

やっぱり、いつの世も天才ってのは変わり者が多いんだろうなと思いつつ、ベッドに横になった。そして登録アイテムのリストを眺め始める高志でった。

（・・・ああ、そういや風呂入ってないな、この世界は風呂あるのかなぁ。でも今日は色々あってもう眠いからいいや、明日・・・明日やろう・・・）
そして、そのまま眠りに着いた。

こうして、異世界最初の１日目が終わるのであった。

第三話（後書き）

細かいことかもだけど、数字は半角の方がいいのか、全角の方がいいのか・・・。

仕様書とかだと半角だけど、小説は全角の方がいいかなぁと思い全角にしてみました。（ノ∀、）

今年の年末年始は休めそうなので、一気に書きます丶（、Д´）ノまぁ、休めたら・・・ですけども（´・ω・、）

第四話

異世界生活二日目。

ヒーローの朝は早い。

そう、世界平和の為に朝食を作らなければならない！

と、まぁそんなこんなで、まずは朝食を作ることになった高志であった。

昨日はマニュアルとアイテムリストを眺めながら早く寝てしまったこともあり、寝坊することもなく夜明け頃に起きることができた。

そして早速、朝食を作る為に台所に向かう。

（・・・着替えないで寝たから、ちょっと汗臭そうだなぁ。まぁ、洗濯は後でやるとして、まずは、朝ご飯作らないとな）

そして、炊飯器と白米を召喚し、お米を研ごうと思ったところで、気づいた。

（・・・水道がない）

辺りを探すと、どうやら水瓶があるようだった。

恐らくは、ここに水を溜めておくのだろう。

飲み水用かどうか分からない為、水質検査装置を召喚し検査してみると、市販されているミネラルウォーター並みにきれいな水であることが分かった。

「あ、調理にはその水をお使いください。保存の魔法が掛けられているので、その水瓶の中の水は綺麗ですよ」
と、いつのまに来たのか、サリーが教えてくれた。

「なるほど、保存の魔法なんてあるんですね。ちなみにこの水はどこから？」

（・・・そういや、ヒーロー・テールで魔法のアイテムがあったなぁ。確か『魔具』って呼ばれてたはずだ。ゲームじゃ戦闘用の魔具ばっかりだったけど、ここじゃ、色々あるのかな？）

「村の近くに湧き水がでるところがあるので、そこから汲んできています。時間がないときや、洗濯に使う水は井戸から汲んでくるんですけど、それでも結構大変なんです。」

（・・・水道か。水道があれば、料理と洗濯も楽になるだろうし、是非欲しいな。とは言っても1日2日でどうにか出来るもんじゃないしなぁ。まぁ、そのうちなんとかしよう。）
と、取り敢えず問題を先送りにしたのであった。

水瓶にあった水を使い、炊飯器をセットした。
本来コンセントを使用するタイプの家電は充電式となっていたので、コンセントがないこの世界でも使えそうだった。
元々、色々な場所で使うことを想定していたのだろう。
常時使い続けることはできないが、使い終わったら登録アイテム空間にいれておけば、自動的に充電されるので、さほど不便ではないだろう。

「それはなにかの魔具ですか？」
と、どうやら炊飯器に興味を持たれたようだった。

「うーん、まぁ、そんなところかな。これで放っておいてもご飯が炊けるんですよ。炊き上がったら自動的に保温してくれるんです。」

「保存までやってくれるなんて、すごい便利ですね。でも、火も使わないでどうやって、ご飯が炊けるんですか？」

「うーんと、電気の力で釜の温度を上げて、それで炊いてる・・・んだと思います。私もそれほど詳しくはないので」
（・・・うぅ、ここで説明できないとは、ちょっとカッコ悪いな、オレ）

「そうなんですか～。こんな魔具は初めてみました。」
それでもサリーには十分な説明だったらしい。

（・・・さぁてと、おかずはどうするか。普段はどうしてるのかな？常温で日持ちしそうな野菜も多少あるだろうけど、他にも欲しい場合は畑から直なのか、保存の魔法が掛けられた食糧庫でもあってそこから持ってくるのかな？）

長い独り暮らしで、それなりに料理もしてきている高志は、多少腕に覚えがある。だから出来るだけ保存食は使いたくなかった。

「うーん、何か朝食に使えそうな食材はないでしょうか？」

「では、牛乳と卵を頂いてくるので、ちょっと待っていてください。

あ、野菜はそこにあるものでしたら、自由にお使いください。」
と、小さめ壷がいくつかあり、それらを指してから、台所から出て行くサリーであった。

（・・・あぁ、折角、ちょっとした新婚生活ムードで一緒に朝食を作れそうな感じだったのに・・・。）
と、内心しょぼくれながらも、野菜を物色しはじめるのであった。

恐らくは、この壷にも魔法が掛けられているのだろう、なかなかに新鮮な野菜が入っていた。
そこにあった野菜は何種類かあったが、見たことがあるものと、ないもの、半々といったところだった。

（・・・取り敢えず、分かる野菜だけ使おう、知らないのは使わない方がいいだろう。調理の仕方が独特のものがあるかもしれないし）

結局何を作ろうとかと考えたが、オイスターソースを使った野菜炒めにすることにした。
一瞬、カレーも考えたが、それは夜のお楽しみにしておくことにした。
ちょっと朝かから重いかなぁと思いつつも食材を切っていると、サリーが戻ってきた。

「ただいまー、牛乳と卵を分けてもらってきました。」

「おかえり。それじゃあ、それを使ってデザートのプリンでも作りますよ。」

「でざーとのぷりん？」

「あー、食後に食べるお菓子みたいなものです。」
（・・・うーん、一部通じない言葉があるなぁ。外来語は特にＮＧだろうなぁ。大きい街に行けば多少は違うんだろうか・・・）
「食後に、お菓子・・・ですか？なんだか貴族の夕飯みたいですね。タカシさんも、もしかして貴族とか・・・？」
「いやいや、私の国では普通でしたよ。みんながみんな、いつも食べるわけではないですが。」
「はぁ～。なんだか、タカシさんの国は色々と変わっていますね。・・・私がこの村をでたことがないからかもしれませんが。」
と、ちょっと寂しそうな表情を浮かべるサリーだったが、高志はあまり気にしなかった。
「うーん、まぁ、そうかもしれませんね。この辺りの国には無い文化が多いかもしれません。」
と、しゃべりながらも手を動かしている。
野菜炒めの野菜はあらかた切りおわり、プリンの調理に取り掛かる。
牛乳と、卵を泡だて器で混ぜ始める。
途中、砂糖を召喚して、適量いれた。
基本的にプリンだけならこの３つを混ぜて、焼くなり蒸すなりするだけで出来る。
後は好みでバニラエッセンスやらビーンズを入れると、よりそれらしくなる。
（・・・やはりここは、焼きプリンよりは、とろふわプリンだろう！）

鍋でお湯を沸かして、そのなかに陶器製のドンブリにプリンの元（牛乳・卵・砂糖をまぜたもの）を入れて、蓋をした。
これで１０分程待って、冷やせば完成だ。
その間に野菜炒めの方を炒めることにした。

途中、サリーと雑談をしながら料理を進める。
なんとも幸せな時間が過ぎていった。

「もうじき、朝食ができますので、イザールさんにも声を掛けておいてください。」

「わかりました。では、父を呼んで来ますね。」

そして、朝食タイム。

「うまく出来たかどうかわかりませんが、どうぞ、お召し上がり下さい。」
（・・・果たして、こちらの世界の人に、地球の味が受け入れられるだろうか？）

「では、頂きますかな。」
と、イザークが早速、白米のご飯を口に入れる。

「これは！！！　確かにおいしい！」
「ほんと！しかも、すごく食べやすい！」

イザークも、サリーも絶賛のようだった。

次に、オイスターソースの野菜炒めに箸をつける。

「この野菜炒めも、素晴らしいですな。今まで食べたこと無いような味だ！」

「ほんとおいしい。一体どんな味付けなんですか？」

「えーと、私の国からもってきた調味料を使ってます。その調味料の作り方まではわからないですけど、海の貝を使ったものだったと思います。」

（・・・まぁ、日本発祥の調味料ではなかったかもしれないけど）

と、心で付け加えた。

大絶賛のうちに朝食もあらかた片付いた。

そこで、食糧空間（冷蔵庫）から、プリンを出して、スプーンで小皿にとりわけた。

「食後のおやつです。こちらもお試しください。」

みたこともない物体に若干抵抗を感じつつも、プリンを口に入れる二人。

「ほほぉ！これはなんとも、味もさることながら、このような食感、初めてですな。」

「口の中でとろけるようで、甘くておいしいです！こんなお菓子食べたこと無いです！」

特にサリーは、目を輝かせながら食べている。

「お口に合うようでなによりです。」
（・・・ふぅ、良かった、なんとか元の世界の料理も受け入れられるようだ）

そんなこんなで、朝食のひと時は過ぎていった。
本日最初のお仕事は無事完了のようだった。

（・・・さぁて、次はワイバーン退治といくか！）

朝食の後片付けも終わり、ワイバーン退治にでかけようとしたところ、高志はイザークに声を掛けられた。

「ワイバーンを退治にいかれるのですかな？」

「ええ、まぁ、なんだかそういうことになってしまいまして・・・。」

「気をつけてください、ワイバーンは下位とはいえ、ドラゴンの一種ですからな。王都のほうでも毎年何人かが被害にあってるようです。以前はこの付近には全く居なかったんですが、どうしてか、この村の近くにも出るようになってしまいました。村を代表して私からもワイバーン退治をお願いします。」
といって、頭をさげるイザーク。

「わかりました、上手くいくかわかりませんが、やってみます。」

まずは、武器の調整をするために、人気の無い森の方に向かった。
使えそうな武器をいくつかチョイスし、『調整』をした。

そこで気づいたが、大型の武器は変身状態でないと使えないものが多かった。
飛行ユニットのように、元々変身状態で使用されることが前提になっているものや、単純に重すぎて生身の状態では扱えないものがあった。
変身すれば、特殊装甲の下にある人口筋肉のサポートで通常の数倍の力が出せる為、大型武器も楽々と使いこなせる。

「よし、あらかた調整も終わったし、さっそく探しにいくか」

まずは、生体レーダーの対象を大型動物に設定して検索する。
そして、その中で空中にいるものを絞り込んでいくことにした。
（・・・群れで行動する習性があれば、まとめてできるんだろうけど、この前一匹だけいたのを考えると、その可能性は低そうだなぁ。まずは、一匹見つけて、こっそり跡をつけてみるか）

取り敢えず、飛行ユニットを使って空中へ、さらに空中でステルスモードに切り替えた。
一応、迷彩機能をＯＮにしておいたが、あまり効果はなさそうだ。
よーく見れば何かいるのがバレるであろうということと、獣の中には臭いを頼りに行動するものがいるからだ。

早速、レーダーに1体ヒットした。

高志は、ワイバーンよりも高く上昇し、見つからないようにあとをつけることにした。
ちょうどそのワイバーンも朝食を終えたあとのようで、巣に戻っていくところであった。

大きな崖があり、そこにいくつかの洞窟があった。
そのなかの一つの洞窟にワイバーンは向かっていった。

（・・・ん？あの崖の洞穴が巣かな？）

生体レーダーで確認してみると、何箇所かの洞窟からワイバーンらしき反応があった。
全部で１０体くらいだろうか。

（・・・さぁて、どうするかなぁ。なんかいきなり殺しちゃうのは可哀想な気がするけど、やるしかないよなぁ）
せめて相手から襲ってきてくれれば、罪悪感も薄れるのになぁと思いつつも、覚悟を決めた。
放っておけば、いずれ人間を襲いに来ることもあるのだ。
サリーが襲われるところを想像して、やる気を出した。

（・・・おのれ、トカゲもどきどもめ！）
根は単純であった。

一応、冷静になって、ワイバーン退治の証拠を残す為、映像記録モードをＯＮにする。
あとでホログラム再生で、見せればフェンリルも納得するだろうという判断だった。

武器の中から小型のロケットランチャーを選び召喚する。
狙いは崖そのものだ。
念のため、近くに人がいないかどうか生体レーダーでチェックする。

「よし、大丈夫そうだな。さらばトカゲもどき！」

引き金を引くと、シュッと音がし、ミサイルが発射される。

ミサイルが崖に命中し、物凄い轟音を立てる。
崖は崩れ、山の半分が崩れ落ちたようだった。

（・・・うわちゃー、やりすぎたか。）

とりあえず、近くに降りて辺りを探してみる。
生体レーダーを確認してワイバーンが生き残っていないことを確かめた。

（・・・そういや、ゲームだとワイバーンの牙とか爪は高く売れたような気がするな。掘り返して取っておこうかな）

こうして地道に掘り返して3体分の死体から、レーザーナイフで牙と爪を切り取った。

「さすがにこんなもんでいいだろう。掘り返す作業は結構キツいし・・・。」

一息ついたところに、巣に戻ってきたワイバーンがいた。正確には巣があった場所に戻ってきた、だが。

そのときは迷彩機能をＯＦＦにしていたこともあり、いきなり襲われた。
今度は死体をできるだけ残しておこうと、超高電圧スタンガンで返り討ちにした。
少しコゲてしまったが、気にしない事にした。

「一応、死体も一匹分くらいは持って帰るか・・・。でも、デカすぎるからフリー空間にもしまえないな。うーん、解体すればいいんだろうけど、そこまで切るとグロいよなぁ。」

と、仕方が無いので、そのまま抱えて飛んで帰ることにした。
一応、みつからないように迷彩機能と、生体レーダーを駆使しておいた。
もしも、地上から人が見れば、ぐったりしたワイバーンが羽ばたきもせず空を飛ぶ異様な光景がみれたであろう。

幸い、昨日の畑には誰もいなかったようで、近くにワイバーンの死体を置いて、変身モードを解除した。

（・・・さて、あとはあのフェンリルが来るのを待つだけか。そういや、待ち合わせの時間決めてなかったな。）

しばらくワイバーンの死体と二人（？）っきりで過ごす事になりそ

うだったが、狩人のダンが通りがかった。

「うお！タカシ、お前、本当にワイバーン倒したのか？」

「ええ、まぁ、重いので死体は1体だけしか持って帰れませんでしたが・・・。」

「は・・・？　1体だけって、何体倒してきたんだよ！普通は一人じゃ、一体倒すだけでも至難の技だぞ！」

ダンは信じられないという顔だ。

「じゅ・・・10体くらいかな？」

「一体どんな魔法を使えばそんなことが出来るんだ・・・。」

ほとんど呆れ顔になっていた。

「それより、ダンさん。ワイバーンの死体で役に立つところとか、売れるものはないでしょうかね？」

「・・・あ、ああ。そうだな。牙と爪はそれなりの値段で売れる。鱗はイマイチだ。ちゃんとしたドラゴンの鱗なら高く売れるんだがなぁ。ああ、あと一応食えるらしいぞ。」

「やっぱり牙と爪は売れるのかぁ。肉ってあとでさばいてもらうことってできますかね？3人前くらいあれば、あとは報酬ってことで好きにして構わないので・・・。」

やっぱりこれだけの大物を解体するのは素人にキツそうだ。色々意味で。

「わかった。じゃあ、あとでオレがなんとかしておこう。」

「一応、フェンリルが納得してからがいいので、あとでいいですか？」

「わかった、オレのほうでも、準備がいるからな。さばきおわったら、村長の家にもっていけばいいか？」

「はい、お願いします。」

そして、ダンは道具と人を集めに去っていった。

「さて、肝心なヤツはなかなか来ないな・・・」

「もう来てるぞ」

のそっと後ろから声を掛けられた。

「うわっ。いつの間に・・・。」

「なんとなく、あの人間がいたから出てきにくかったのだ。」

「意外と小心者なんだな。」

といって笑う。

「う、うるさいっ。それより成果を聞かせろ！」

「まぁまぁ、そんなんで怒るなよ。成果はバッチリＯＫだったぞ。」

「ばったりおーけー?訳の分からないことを言って誤魔化そうとするな!」

「ああ、悪い悪い、一応、ワイバーンの方はほとんど倒したと思うぞ。あとそれと『ばったり』じゃなくて『バッチリ』な。」

「ふんっ、そのわりに一匹しか死体がないじゃないか。他のはどうした?」

「じゃあ、そのときの映像を見せてやろう。」
そういってホログラムで、ワイバーンの巣を壊滅させたときの映像を映し出した。

「!!!!!」

「な?ほとんど倒してるだろ?巣にいなかったのもいるだろうけど、巣がなければ他にいくんじゃないか?」

「・・・」

「ん?どうした?」

「い、いや・・・お、お前、なかなかやるな・・・」
フェンリルは明らかに動揺していた。

「まぁ、これで約束通り、村の畑には手を出すなよ?　また手をだしてくるようなら」

と言って、ちょっと凄んでみた高志。

「わ、わかってる！あ、安心するがいい、人間よ。今後はこの村の畑には手をださないように言っておく。」

動揺しながらも偉そうに言うフェンリルであった。

「そうか、それじゃ、これでひと段落だな。お前も元気でな。」

「フ、フン、人間、名を聞いておこう。」

「上杉高志だ、まぁ、タカシって呼んでくれ。」

「ウエスギ・・・どこかで聞いたような。まぁいい、タカシそれでは縁があればまた会おう。」

そういって、去っていくフェンリル。

（・・・あ、あいつの名前聞くの忘れてたな。まぁ、そうそう会うこともないだろうし、いっか。）

こうして、なんとか依頼を終えた高志は、村長の家に帰っていくのであった。

第四話（後書き）

今回はちょっとチート性能が披露されてきた感じです（´・∀・、）
料理に文字数使いすぎだろか（´・ω・、）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9716y/

ファンタジーに未来兵器を

2011年12月18日03時53分発行